



Drip
#001

踏み出した一步。
その先の出会いが、
私を変えた。

はじめは漠然とした海外への憧れだった。留学や国際教育への関心、地元国公立への進学。これらを満たす進学先が静岡文化芸術大学だったのは、ある意味必然だったのかもしれない。文芸大の近くで生まれ育ち、幼い頃から大学のイベントに参加したり、屋上で家族と遊んだりとか何かと縁があった。

入学したばかりの私はどちらかというと受け身だった。大学生活は楽しく充実していたけれど、もう一歩踏み出しきれない自分がいた。そんな私を変えたのが、大学2年次に経験したアメリカへの長期留学だった。自由の国アメリカでまず感じたのは「自分から動き出さないと何も生まれない」という現実。積極的に行動しなければ、しなかったことが実現できないと痛感した。そんな環境に身を置いたことで、価値観が大きく変わったと思う。

さまざまな文化や考え方を持つ人と接する中で視野が広がり、「一つずつ、歩ずつ成功体験を積み重ねるうちに、気づけば挑戦し続ける自分がいた。

特に印象的だったのは、日本文化教室の立ち上げから運営までを現地の友人とやり遂げたこと。何もない状態から形にし、参加者の笑顔を見ることができた瞬間、大きな自信につながった。帰国後は世界各地の移民問題に関心を持つようになった。文化的背景や宗教の違いから、移住先で帰属意識を持つ、疎外感を抱く人が多い。この問題は、数十年以内に日本でも顕在

化するだろう。しかし研究の進み具合は、世界と比べて遅れているように感じる。多文化共生という言葉こそ広まつつあるものの、宗教が違う人と共に暮らす意識を持つている日本人はどれほどいるのだろうか。そんな焦りのような感情が私の中で大きく湧いていった。

ある時、語学パートナーをしている韓国人や台湾人の留学生とたき火バー

ティをした。国単位で見れば歴史的、政治的な問題があるかもしれない。でも実際は、そんなことを気にする間もないほど楽しかった。同じものを食べ、同じ景色を共有する。個人と個人がながる場では、国家間のいざこざなんは関係なかった。それどころか、こうした関係が積み重なれば、長期的に見て国家間の関係にも良い影響を与えられるのではないか。そんな期待

が生まれた出来事だった。

卒業後はドイツの大学院に進学する予定だ。ドイツは日本と似た歴史的背景を持ちながら、国際協力や移民政策の研究が進んでいる。そこで学びを深め、将来的に日本に還元したいと考えている。大学卒業後に海外の大学院へ進学することは、日本ではまだ一般的ではない。それでもこの選択を後押ししてくれた環境には本当に感謝している。まだやり直しがきく今だからこそ、挑戦と失敗を重ねいきたい。入学当初の私は何事も受け身で、主体的に動くことはほとんどなかった。アメリカ留学を経て、挑戦すること、失敗すること、人に相談することの大切さを学んだ。

静岡文化芸術大学での四年間が、憧れでしかなかった世界を目に見える目標へと変えてくれた。四年間という時間は平等でも、その先で得られる結果は決して平等ではない。挑戦し続けた時間が、私にかけがえのない学びをくれた。

平澤 美依奈

文化政策学部
国際文化学科4年



